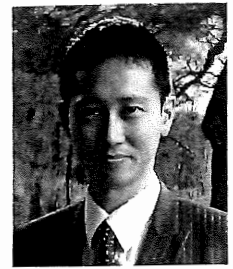


《巻頭言》

柴五郎と日英同盟 —国際的信頼の重要性—



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

柴五郎は今や忘れ去られた英雄の1人であろう。学校の歴史教科書にも登場しない。

日露戦争の遠因は1889年3月に中国山東省で起こった「義和団の乱」にある。日清戦争敗北後、列強諸国の餌食となっていた清国の危機に対し、一種の宗教的秘結社であった義和団が「扶清滅洋」を叫んで惹き起こした暴力的排外運動である。キリスト教会焼き討ち、在留外国人襲撃と、暴拳の限りを尽くして北清地域を席卷し、天津を経て北京に迫った。

1900年6月、ついに北京入りし、在外公館区域が包囲されてしまう。これを機に、当初、傍観していた清朝は義和団を支援し列強諸国に宣戦布告したため、日本を含む8カ国による連合軍は共同出動に踏み切った。在外公館区域には約4,000人余りの外国人と中国人クリスチャンが避難していた。武器弾薬は勿論、食糧も医薬品の備えもない。そんな中、約1万人にも及ぶ義和団と清国正規軍が押し寄せてきた。相対するのは義勇兵を合わせても僅か600人足らずの連合軍の守備兵である。それを率いたのが柴であった。

会津生まれの柴は、戊辰戦争の際、自刀により肉親を失い、俘虜となった後、下北半島の火山灰地で酷寒と飢餓の苦しみを味わうという壮絶極まる幼少期を過ごした。やがて陸軍幼年学校に入り、不屈の闘志で軍歴を重ね、日清戦争では大本営陸軍参謀、その後、陸軍中佐に昇進し、駐清公使館赴任から間もなく義和団の乱に遭遇したのであった。

柴は自ら築き上げた情報網を駆使して機略に富んだ攻守の作戦を立て、大勢の敵軍

を前に右往左往することなく日本兵を率いた。さらに中英仏の言語を自在に操りながら連合軍の守備兵との意思疎通を図り指揮統括した。そんな柴のリーダーシップと勇猛果敢な日本兵の姿に連合軍の守備兵は士気が鼓舞され、激闘の末、義和団の乱は鎮定される。こうして55日間の「北京籠城」は終わりを告げた。

柴の名は世界に鳴り響いた。作家の村上兵衛の作品『守城の人：明治人柴五郎大将の生涯』（光人社、1992年）に、当時23歳だったシンプソンというイギリス兵の日記の一部が紹介されている。そこには「日本軍は素晴らしい指揮官に恵まれていた。公使館付武官のリュウトナン・コロネル・シバである。（中略）この小男は、いつの間にか混乱を秩序へとまとめていた。彼は部下たちを組織化し、さらに大勢の教民たちを召集して、前線を強化していた（中略）ほくは、自分がすでにこの小男に傾斜していることを感じる。ほくは間もなく、彼の奴隷になってもいいと思うようになるだろう」とある。

その後、日本は世界最強の陸軍大国たるロシアと戦い見事に勝利した。最大の勝因はイギリスとの間で日英同盟を結んだからに他ならない。イギリスが日本と手を組んだのは、ロシアの南下により中国大陸における自らの権益が侵害される危険性あったからである。しかし同時に「北京籠城」で見せた柴と日本兵の振る舞いが日本の評価を高め同盟締結の大きな後押しにもなったのである。

外交において、いかに国際的信頼を得ることが重要か。柴を通じて理解できよう。